HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	岩手県の震災復興と観光
Author(s)	五日市, 知之
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 34-42
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61159
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_05itsukaichi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

西山徳明，西川克之，花岡拓郎，平井健文編
『自然災害復興における観光創造』
CATS 叢書第 9 号: 4 章 35-42，北海道大学観光学高等研究センター（2016）

岩手県の震災復興と観光

五日市 知之
岩手県二戸市地域振興課

1. はじめに

1.1 二戸市の概要

岩手県二戸市役所地域振興課の五日市です。本日は岩手県の震災復興と観光について，海津先生に先立ち，私の方から説明したいと思います。よろしくお願いします。私は，2011 年度と 2012 年度に宮古市のプロジェクトに関わった後，2013 年度，2014 年度に岩手県の東京事務所に出向しておりました。これらの経験や見聞きしたことを本日お伝えできればと考えています。

まずは二戸市の概要をお話しします。岩手県二戸市は，岩手県の内陸で最も北にある市であり，人口およそ 2 万 8 千人，面積が約 420 平方キロメートルの林野率 68%の中山間地域です。2002 年度に東北新幹線の二戸駅が開業し，アクセスとしては東京から二戸間が 2 時間 52 分ということで，非常にドア・ツー・ドアで東京からも来やすいところになっています。また，生漆の生産量が日本一。葉たばこの販売額が全国 3 位。観光地としては，瀬戸内寂聴さんが住職を務められた天台寺，豊臣秀吉の天下統一最後の地と言われている九戸城跡，そしてスライドの写真にある馬仙峡といった名勝地があります。

二戸市の特産品としては雑穀があります。また若鶏，これはブロイラーの生産量が日本で第 3 位となっています。他にも短角牛や佐助豚といったものがあります。りんご，ブルーベリー，さくらんぼ，南部せんべい，そして地酒は南部美人。さらに漆の生産量が日本一となっています。こちら，日本の漆の中のおよそ 7 割を生産しています。

1.2 二戸市の宝を生かしたまちづくり

二戸市のまちづくりについて，先ほど真板先生が本をお書きになるといっておられましたが，真板先生には 24 年前から二戸市でお世話になっております。二戸市は自分たちの住んでいる地域に誇りを持って暮らせる街を目指す「二戸市宝を生かしたまちづくり」というものが 1992 年 7 月にスタートしました。

宝を生かしたまちづくりの取り組み事例として，市内の案内板を 9 地区に設置，宝の説明板・誘導板を設置，宝マップを作成，宝を生かしたまちづくり条例の施行，宝めぐりツアー，モンゴル草原の風☆星祭り，FUKUDA ポスター展，二戸シビックセンターでの宝の展示，奥州街道を歩く，雑穀と巨木めぐりツアー，そして全国エコツーリズム大会 in 二戸といった取り組みをしてきました。現在ではこういった宝を生かし，盛岡以北の岩手県内を運行するローカル線の IGR いわて銀河鉄道と提携し，「にのへ✤おさんぽ日和」とい

う題名をつけ，エコツアーを毎月開催しています。平成 27 年 4 月には二戸市内の桜の名所めぐりツアーを開催しました。

九戸城での桜の観覧の様子です（写真 1）。

二戸の深山神楽という神楽をコースに取り入れた際の写真です（写真 2，3）。

地元の方がヤマメを提供してくださり，神楽を舞いにきた子どもたちが焼いてお手伝いをしてくれています。5 月に開催されたツアーは，足沢という地区で山菜採りツアーを開催しました。足沢のお母様方が地元の郷土料理を用意してくださり，そこで参加者がそれを食べているというところです（写真 4）。ツアーの参加者の方が地元の方の案内で，山の中を散策し，山菜を収穫しているところです。こういった地域の宝を素材にしたエコツアーを継続して開催しています（写真 5）。

2. 震災後の動き

2.1 震災後の二戸市の動き

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分頃，三陸沖を震源とする大地震が発生し，二戸市においても震度 5 弱を記録しました。二戸市は中山間地域ですので津波そのものの被害はありません。そのため被災地に比べるとかなり被害は軽微なものになっていると思います。人的被害はなし，建物被害は 1 地区で地すべりによる倒壊 3 棟。市道関係は被害総額が 10 万円。産業関係は特に，全国 3 位のブロイラーの産地でしたが，そこで大きな打撃がありました。上下水道関係は団地等で一部断水。文化財関係は天台寺，古仏像が 1 体損傷。電力関係は停電。3 月 12 日 20 時に市内全域で復旧しました。そういった状況も伴い，3 月 11 日 14 時 55 分に災害対策本部を設置し，災害対策本部員会議を平成 23 年 4 月 1 日までに延べ 35 回開催しましたが，4 月 1 日以降は災害支援本部へ移行し，二戸市から被災地へと対応を受けていました。情報提供は防災行政無線で随時放送し，カシオペア FM というローカル FM ではありますが，そちらの情報番組や市本庁舎 1 階市民ホールでの情報掲示や，市ホームページでの情報提供を実施していました。

次に，震災直後の被災地への支援の状況ですが，2011 年の 4 月 1 日以降，次のような支援を行ってきました。物的，人的支援が延べ 159 日間，248 人の職員を派遣，給水支援 4 回，保健活動支援 6 回，災害活動支援 10 回，救援物資輸送 10 回，炊き出し支援 10 回，散髪ボランティア 2 回。こちらは民間の美容師の方から申し出があり，行ったものです。し尿処理 3 回，火葬 19 回，41 体受け入れ。また，市民，市内企業からの救援物資等の提供が 787 件。二戸市でも誘致企業がありますが，そういった企業からの救援物資が多かったのが印象的です。また，職員派遣については現在でも毎年続けており，沿岸市町村へ今年度は野田村，釜石市，宮古市へ合計 3 名派遣しています。

2.2 震災後の岩手県の観光の動き

続いて，岩手県の観光について紹介します。岩手県の震災以降の観光は，大きなトピックスが続きこうした面でも復興に向けた追い風があったと感じています。2011 年 6 月に平泉が世界遺産に登録決定。登録後 2 年連続で観光客が 2 倍になっています。また，2011 年の 11 月 20 日には復興道路が着工しています。岩手県の横のつながりの道路や，沿岸地域の縦の道路は山間を越えていかなければならない道路が多かったので，こういった部分が震災以降に整備されることにより，かなり移動がしやすくなったと感じています。また，2013 年の 4 月 1 日に久慈市を舞台とした NHK 朝のテレビ小説「あまちゃん」が放送開始されました。私が岩手県東京事務所にいた時に，名刺交換をすると岩手県というだけで「じぇじぇじぇ！」と言われるなど，多くの方から人気があった番組でした。2014 年 4 月 12 日には釜石線花巻から釜石間で「SL 銀河」が営業運転を開始しています。

また，最近の沿岸の状況としては，各地で海開きが行われ，海水浴シーズンとなっています。震災直後は海開きができませんでしたが，平成 27 年度は 8 ヶ所でオープンされ，沿岸，砂の上を裸足で問題なく歩けるような状況となっています。釜石市では，橋野鉄鉱山・高炉跡が「明治日本の産業革命遺産：製鉄・鉄鋼，造船，石炭産業」の構成資産として世界遺産一覧表に掲載されることが決定しています。さらに，2019 年に開催されるラグビーのワールドカップの開催地のひとつに釜石市が選ばれています。また，平成 28 年 1 月から「2016 希望郷いわて国体」が開催されます。震災復興国体と位置づけ，全面的に岩手を盛り上げようと進めているところです。こういった沿岸復興のトピックスは震災以降に発行されている毎月 1 日，15 日の月 2 回発行の「岩手復興だより」で紹介されています。

2.3 震災以降の人のつながり

岩手県東京事務所での勤務で出会う方は，首都圏に在住していても，被災地には行けないまでも，何かをしたいという方々が非常に多くいらっしゃいました。復興マルシェ，社内物産展を開催したいという企業様からも数多くご相談いただき，首都圏で開催されるイベント等でも被災地ブースのへの出展依頼も多く頂きました。イベントステージでも被災地の郷土芸能を知りたいということで，お招きいただいたこともございます。岩手のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」が出展を行うことが多いのですが，震災以降は毎日首都圏のどこかで出店しているという状態が続いています。

また，地元岩手のために何かをしたいと，岩手県出身で首都圏在住の女性で構成された「いわて銀河プラザ応援女子会 anecco.」というグループがいわて銀河プラザにはあります。メンバーの方々は，普段自分たちの職業を持っていますが，ボランティアでも何かしたいと自分たちの持つスキルを活かし活動をしています。活動のひとつに岩手の人，モノを紹介するフリーペーパーの「anecco.通信」があります。第 9 号「きばるわげもん号」

では，3.11 から立ち上がり地元でがんばる若者たちを紹介し，第 10 号「いわでさいぐんべ号」ではおススメの岩手の観光スポットを紹介するという取り組みをしています。

他にも，震災を契機にできたつながりは多く，「岩手移住計画」の代表の手塚さや香さんという方がいますが，こちらの方は元新聞記者の方で，たまたま盛岡に最初に赴任したことをきっかけに，どうしても岩手が好きで岩手に移住したいということで震災後，釜援隊という組織に属し，釜石を拠点に活動をしている方ですが，実際に移住する際，移住の手続きが迷った経験があることから，もっとスムーズにやれば岩手にかかわった方々が非常に移住しやすいのではないかということで活動をおこなっている人です。また，「赤坂さんさ」というさんさ踊りが好きな人が集まる団体がありますが，岩手出身の人や，震災でボランティア等で岩手にかかわった方がとても岩手が好きすぎて集まってしまったという団体で，どうしてもさんさに出たいということで，さんさの練習を一生懸命して東京から盛岡に来てさんさに出ています。さらに，岩手県では 6 団体 230 名（H26）の方々が復興支援員として活動しています。集落支援員として 2 市 16 名（H26），地域おこし協力隊は岩手県では 6 市 14 名（H26）の方々が活動しています。

3. 災害学習について

3.1 宮古市「学ぶ防災」について

宮古市の学ぶ防災について紹介をしたいと思います（写真 6）。

こちらは，宮古市の田老地区の防波堤の上にあがり，被災の状況をガイドの話を聞きながら歩くというツアーになっており，宮古観光文化交流協会が行っている事業です。内容は田老防波堤の案内と，震災時の DVD 上映です。防波堤近くの「たろう観光ホテル」は震災遺構になり現在工事中です。ツアーは通年開催しています。利用実績は年々伸びており，2012 年度は 1,017 件，18,928 人，2014 年度は 1,593 件，28,067 人の方々が利用しています。

最初につくられた第一防波堤が，現在残っている防波堤であり，一番強固な防波堤になっていました。第二防波堤と第三防波堤がその後につくられた防波堤で，結果的に X の形になってしまい，真ん中へ波の力が非常に大きくぶつかってしまい，決壊をしたと聞いています。

田老は過去に幾度もの津波被害を受けながらも復興を遂げてきた地域だからこそ伝えられることがあります。田老では過去の災害の経験がまちづくりに生きていました。隅切りというものがあり，角を直角ではなく少し切って道をつくり，急いで車が通っても隣が見えやすいという工夫がされています。また，現在ソーラーパネルも整備されています。田老のまちづくりは碁盤の目のように整備された街並が広がっています。被災した田老観光ホテルは，現在は震災遺構として工事中です。さらに現在は，実際に田老地区の避難道を歩

いて，防災に取り組んできた先人たちの教えを学び次世代へと教訓を語り継いでいくという体験型教育学習にも取り組まれていると聞いています。

3.2 首都圏での震災を学ぶ機会について

いわて銀河プラザでは岩手を学ぶ機会として，「いわて学講座」を開催しています。震災の以前から毎回テーマを変えて開催されていましたが，震災以降は首都圏での被災地への関心の高まりから，震災ガイドの方を講師に招いて実施をしています。これまで岩手県沿岸各地の方を招き開催しています。また，いわて観光キャンペーン推進協議会では震災ガイドつきのバスツアーを毎年企画して実施しています。

4. おわりに

震災後，「意識」するようになったことは，やはり岩手県は広く，私が住んでいる二戸市と沿岸地域とでは観光素材も大きく違い，県内でも南部藩と伊達藩という 2 つの地域があり，まったく文化が違うなど多様性が存在します。震災においても，津波被害を受けた地域と，被害を受けなかった内陸部とでは被害はまったく違いました。変わったことといえば，これまで目を向けていなかった地域へ意識を向けるようになったことと，足を運んでいなかった地域へ行くようになったことがあげられるかと思います。やはり，東京まで私たちは 2 時間半でいけますが，沿岸被災地へ行くには 3 時間車で走らなければいけないので，岩手県の中でも二戸市からすると沿岸というのは遠い存在でした。そういったところでこれまで知らなかった地域を知ることによって震災を契機に生まれた地域と地域のつながりや，個々のつながりを組み合わせることで観光を通じ新しい魅力を作れる可能性があると感じています。ざっとでありましたが海津先生にお繋ぎしたいと思います。

写真１　九戸城跡でのエコツアーの様子（撮影：筆者）

写真２　ツアー客に披露された深山神楽
（撮影：筆者）

写真３　ツアー客に振舞われたヤマメ
（撮影：筆者）

写真４　足沢のエコツアーの様子（撮影：筆者）

写真５　足沢のエコツアーでの山菜収穫の様子（撮影：筆者）

写真６　岩手県宮古市田老地区「学ぶ防災」の様子（撮影：筆者）

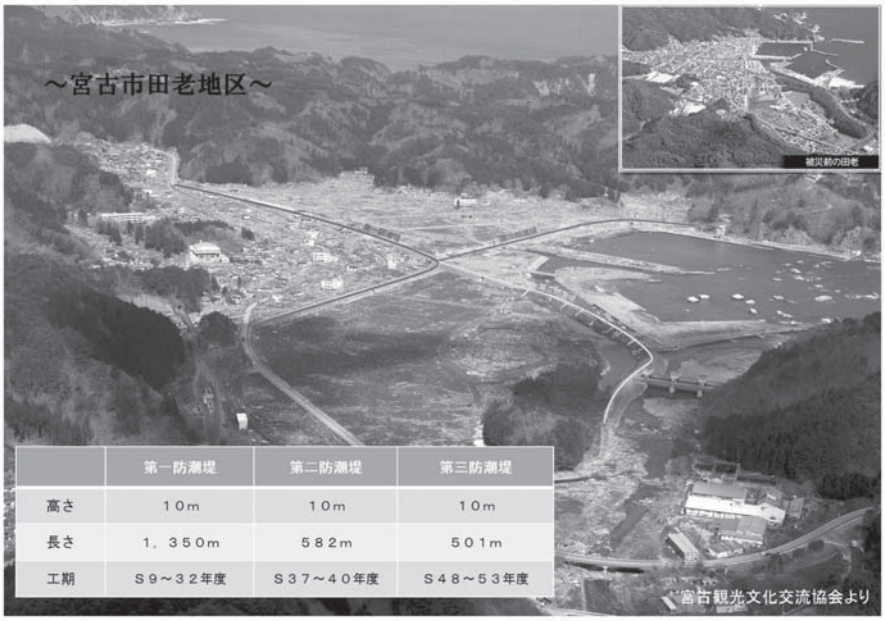

図１　田老地区の被災後の全景図（提供：宮古観光文化交流協会）

図２　被災の教訓をいかした田老のまちづくり（提供：宮古観光文化交流協会）